

史料報

第 25 号

昭和51年10月



旧館全景（旧三井文庫、その後文部省史料館、1号書庫を除いて今年度中に取壊わしの予定）

田中康雄氏提供

新築工事に伴う

史料の閲覧停止について

目次

- (1) 新築工事に伴う史料の閲覧停止について
「東京市史稿」の編纂について
..... 菊池 昭
- (2) 農村文化と茶道―「千秋家文書」の整理を終えて―
受贈図書
..... 浅井潤子
- (12)(8)(5) 史料報

財政などの事情により中断していた新築工事が、いよいよ本年度中の完成を目標に開始され、このために閲覧業務の長期停止が日程にのぼってきたので、これまでの経過と合せてお知らせします。

昭和四十七年五月改組以来、新築に伴う業務室および史料の移転のための閲覧利用の一時停止は避けられない条件であり、当館としては、停止期間の短縮を計るなど、利用者のご不便を最小限に抑えるように努力して来ましたが、

しかし、当初は新築工事の完了まで存置できる予定だった旧館が、その後の情勢の変化により、着工直前の本年六月になって一部の取壊しが必至となったため、

ついに八月一日から九月上旬までの間を急に閲覧停止とせざるを得なくなりました。しかも、この時期の決定が二転三転したため、最終的に閲覧停止の予告期間を十分にとることができず、大変ご迷惑をかける結果となりお詫び申し上げます。

このことは、文部省史料館以来三〇年近く、多くの利用者に親しまれて来た旧館（上段写真）が、歴史的にも史料保存

を目的とする洋風建築として最も古い部分に属するものでありながら、これを新計画のなかに活用しきれなかったことも関連しており、誠に遺憾に思います。

今後の予定としては、旧館の取壊し作業終了後、九月中旬から十二月二十七日まで仮設の閲覧室で業務を続行します。設備など不十分な点が多いが、閲覧停止期間短縮のための措置とご諒承下さい。右の閲覧業務は今年末で終え、来年一月から新書庫への史料の移動を始めます。これに要する期間の予測は確定的ではありませんが、現在のところ約六カ月と予定し、その他の準備期間を含めて来年夏ごろに再開したいと考えています。

なお、再開後の閲覧室は当初の予定を変更し、改装後の北館一階を予定しています。設備など、閲覧の条件は最良ではありませんが、数年後に改築する見通しですので、当分ご不便をかけますが、事情ご賢察の上、ご協力をお願いします。

また、出版など営業用の撮影申請は、今年九月から来年の閲覧再開まで受付を停止します。

『東京市史稿』の編纂について

一 編纂前史

東京都における史料編纂事業は、旧東京府・市のそれを継承して今日に及んでおり、その根幹をなすものは、『東京市史稿』の編纂である。

東京市史編纂の事業は、明治三十四年十月、東京市参事会の建議に端を発する。あたかも、市制特例廃止によって、東京市がようやく自治体としての一步を踏み出して間もない時期である。その建議案は、次のよう

東京市政ニ関スル沿革史ヲ調査
編纂スルノ議

惟フニ一國ニハ必ズ一國固有ノ制度存シ、一市ニハ又自ラ一市特種ノ典例無クンバアラズ。抑々我東京市ハ、天正十八年徳川家康入府以来、天下ニ號令ヲ下シタル所ニシテ、既ニ封建時代ニ在テ政權ノ中心タリキ。況ンヤ幕府政ヲ朝ニ致シ、皇上鼎ヲ此ニ定メ玉ヒシヨリ、倍々四方ノ幅濶スル所トナリタルニ於テヤ。是ニ於テカ明治二十二年四月各都市ニ現行市制ヲ

菊池 昭

(東京都公文書館主任調査員)

施行スルニ方リ、本市ニハ特例ヲ施キ、他ノ都市ト之ヲ區別セリ。而シテ又明治三十一年十月特例ヲ撤回シ一般市制ヲ施行スルニ至リタルモ、尚ホ二三特種ノ異例ヲ存シタリ。夫レ此ノ如ク本市行政上ノ組織ハ、他ノ都市ト全ク其選ヲ異ニシ、大ニ錯綜複雑シタルモノアリ。故ニ今日ニ於テ本市行政ニ関スル沿革ヲ調査編纂スルハ、本市ノ行政上極メテ必要ナリト信ズ。他ナシ、將來本市ニ於テ一事ヲ為シ一業ヲ起スニ方リ、既往ノ歴史ニ鑑ミ、然ル後チ行フト否トハ、其利害ノ繁ル所決テ鮮少ニアラザルベケレバナリ。今日夫ノ欧米諸國ニ於テ、地方自治ノ倍々発達スル所以ノモノハ偶然ニアラズ。主トシテ地方制度ニ関シ、自他ノ長短ヲ比較論究シ、若クハ其沿革史ヲ纂輯刊行シ、若クハ賞ヲ懸ケ広ク地方行政ニ関スル著作ヲ求メ、鋭意熱心ニ既往ノ歴史ニ證徴シテ以テ地方行政ノ刷新ヲ図ルニ是レ由レリ。而シテ我現行地方制度モ

亦隱約範ヲ彼ニ採リタルノ跡ナキニアラズ。蓋シ全然人情風俗ヲ異ニシタル他邦ノ制度ハ如何ニ善良ナルモノト雖モ、直ニ採テ我ニ移シ得ベキモノニアラズ。(中略)徳川政府時代ハ勿論、遠ク鎌倉時代ニマデ遡リ、地方制度ニ関スル凡百ノ事項ハ、一切之ヲ蒐集シ、以テ本市ノ行政ニ資スルハ、敢テ無用ノ業ニアラズ。然モ此等ノ事業ハ、之ヲ他日ニ譲リ、先ツ明治元年ヨリ三十四年度ニ至ル本市ニ関スル制度ノ沿革ヲ調査編纂スルハ、實ニ本市今日ノ急務ナリトス。(下略)

建議案の可決により、市は直ちに参事会員、市議員各一名を名誉委員とし、他に九名の委員をもって市沿革史編纂委員を設置し、明治以来の市の沿革史を調査編纂することとし、ついで委員会規程および左記の編纂部門を定めた。

職制 會議 財政 市有財産
市区 橋梁 河溝 交通運輸

教育 衛生 警察 救恤 宗教
墓地 公園 兵事 水道 雜

建議案可決から編纂計画の決定に至るまでの経過は、あまりにも安易、速成にすぎると思われるが、果して、着手してみると、建議にいうように、

短期間に、しかも市吏員中の適當者に公務の余暇をもつて従事させられるほど容易ではないこと、また相當の経費を必要とすることが明らかとなった。

このため、翌三十五年四月、『東京市史編纂ノ件』を市会に上程した。その提案説明には「本市百般ノ事物時ト共ニ變遷ヲ重ネ今日ニ至ル。故ニ現在ノ状況ヲ以テ直ニ此レカ由来ヲ知ル可ラズ。然ルニ公文書中各保存期限アリ。他年廃棄ニ属セバ又徵據スヘキモノナキニ至ラン。依テ此際本市ニ對スル制度、本市ノ經營シタル事業及風俗民力等、其沿革ヲ審ニシ、既往ノ事歴ヲ知り、將來ノ参考ニ資セントス。」と述べている。市会では、かなり紛糾の末、原案どおり三か年継続事業とし、初年度予算三千円を可決した。ここで、前年設置の東京市沿革史編纂委員会は、半年足らずで、東京市史編纂委員会と改められ、新たに規程、細則を定め委員を改任した。

三か年継続事業としたのは、三年間に完成することを一応の目途とする意味であり、史料収集の難易により、場合によっては延期することもありうる。また、維新前にさかのぼって調査できる事項については、十分

に調査を尽くすことを含みとしていたのである。

東京市が、府と前後して編纂事業を企図した背景には、明治三十三年、帝大史料編纂掛による『大日本史料』『大日本古文書』の出版開始や、三十四年五月、大阪市史編纂事業の発足などが、ひとつの刺激となったであらうことは、市会における討論のなかからも十分に推測することができる。ただ、さきの建議や提案説明にもみられるとおり、少くとも、編纂の動機においては、しばしばみられる年回の記念史誌に類するものの刊行をもうろんだものではなかったといえよう。

とはいえ、編纂の目的を達成するには、現実の態勢は、きわめて不備であった。市史編纂委員会に組織改変後も、依然として、編纂委員には、名誉会員若干名のほか、執務の余暇に編纂業務を兼務する職員をもってこれに充てていた。加えて、日露戦争のため、不急事業の予算大削減により、ほとんどみるべき成果があらならないまま経過した。

二 『東京市史稿』の編纂

明治三十八年十二月、委員会規程を改正して、三たび組織に変更を加え、その整備を図った。すなわち、

従来の名誉委員を廃し、助役を委員長に、市会議員三名を調査嘱託とし、初めて専任の編纂員を置き、編纂嘱託三名、事務員三名および臨時雇一名をもってこれに充て、編纂庶務は内記課員一名の兼任とした。この委員会規程は、昭和十年十月廃止に至るまで改正をみることなく継続した。さらに、四十年に至り、これまでの編纂方針を根本的に改め、記述の範囲を拡げて維新前にさかのぼることとし、同時に、市史編纂方法を大要次のように定めた。

- 一 史料の全備を待たずに編纂に着手する必要から、とりあえず『東京市史稿』と題して仮編纂をなし、完結後訂正補修する。
- 二 編纂の便宜上、市史を別記十五篇に分ける。
- 三 記述の体裁は、総記、各記に分つ。

第一篇総記は、都市発達の大勢を概括的に叙述し、簡明なる市史とする。

第二篇以下の各記も総記、各記に分け、総記を独立の部分史（項目別通史）とし、各記を編年体の史料集とする。第二篇以下は市政執行者及び市史研究者の参考に資するに足るものとする。

四 編纂の順序は各記を先にし総記を最後にする。

各記から順次稿本として編纂刊行するとしたのは、史料の完備を待っているのは、市史の完成がいつになるか見通しのつかないことをおそれたためである。『東京市史稿』の当初の予定総目次は次のとおりであるが、市史の編纂をもって、他方において史料の散逸を防止し、かねて行政上の参考に資するという要請にこたえようとする以上、勢い精細な叙述を必要とし、その結果、膨大な内容のものとなったわけである。

東京市史稿 総目次（仮）

- 第一篇 総記 東京市史
- 第二篇 各記第一 東京市地史
- 第三篇 各記第二 東京市政史
- 第四篇 各記第三 東京市産業史
- 第五篇 各記第四 東京市交通史
- 第六篇 各記第五 東京市教育史
- 第七篇 各記第六 東京市宗教史
- 第八篇 各記第七 東京市衛生史
- 第九篇 各記第八 東京市兵事史
- 第十篇 各記第九 東京市救済史
- 第十一篇 各記第十 東京市文芸史
- 第十二篇 各記第十一 東京市風俗史
- 第十三篇 各記第十二 東京市外事史
- 第十四篇 各記第十三 東京市民史
- 第十五篇 附記 東京市発達年表

東京市史稿第二篇 目次（仮）

- 各記第一 東京市地史
- 前記一 立市前ノ沿革
- 前記二 徳川氏時代ノ沿革
- 本記 維新以来ノ沿革
- 附記 東京市地史年表

各記 一、皇城史 二、市街史

三、港灣史 四、河渠史

五、池沼史 六、道路史

七、橋梁史 八、上水史

九、下水史 十、遊園史

十一、築地史 十二、変災史

十三、名所古蹟

（第三篇以下、第二篇にならう）

かくて明治四十四年末、最初の一冊である『皇城篇第一』を刊行した。これ以後現在に至るまで継続編纂中の『東京市史稿』は、各篇とも江戸開府以前から明治末年に及ぶ編年体の史料集で、東京（旧市域を主とする）の主要な歴史事象を年月日順に綱文として掲げ、その下に関係史料を整理配列している。（菊判、各巻平均千ページ）。綱文を掲げるほどではないと判断した事象については、「附記」とし、掲記した事象を学証する直接史料ではないが、関連ある史料は適宜「参考」として付載する。例えば、「享保二十年正月青木昆陽蕃薯試作」の項末に「参考」として、青

本文蔵の伝および家譜等を載せる類である。

この編纂事業は、もとより完結までには相当の年月を要するとは思われたが、当初から、半世紀余に及ぶ事業になるとは予定していなかった。大正八年に至り、事務当局の提案で計画を変更し、事業を二期に分け、一期に完成すべきものとして次の諸篇を決定、年間二冊刊行とした。

皇城 市街 変災 上水 救済
教育 河渠 墓地 市政 産業
港灣 交通 遊園 宗教 衛生

たまたま、大正十二年の大震災は史料保存の重要性を改めて認識させた。『上水篇第四』の原稿は印刷所で焼失、採訪予定の史料も多くは焼失して大打撃を被った。将来のためできる限り詳細に史料を集録して刊行することの必要が痛感され、市街篇などは十数巻で完結予定のところ五十七巻に変更された。しかし、委員会で、一面また早期完結も考え、組織拡充による速成計画案も立てたが実現しなかった。

従来、編纂に必要な史料は、各省、史料編纂所、帝大図書館、帝國圖書館、内閣文庫、各社寺、華族、旧家等に負う所が多かったが、震災によつて大半が焼失し、市史の根本史料と

しては「旧幕府引継書類」と東京府の文書、記録類があるのみという状況であった。ちなみに、当館所蔵「藤岡屋日記」(一五四冊)は、焼失前の東大図書館で筆写したもので今日残された唯一のものである。

市史稿の印刷組体裁は、当初から綱文四号、本文五号(一〇・五ポ)活字、一行三三三字詰、一頁一五行であったが、昭和六年に、これを綱文一二ポ、本文九ポ一七行、一行三六字詰、さらに十年には一行四六、七字詰とした。(現在もこれに準じている。)早期完結への一つの対策であった。昭和十八年三月「市街篇第三十八」をもって、太平洋戦争のため刊行を中止することになった。事業開始以来この時まで刊行したものは、一〇篇七五巻、附図八点を数える。

三 現 況

昭和十八年七月都制施行から戦後数年に至る間は、旧東京府文書、記録類、編さん史料、完結原稿および参考図書等の疎開作業とその整理、目録作成、史料調査等に費された。

昭和二十七年、再び「市史稿」の出版を開始した。ついで都政史料館を設置し都政に関する史料の編さん、保存に当ることとしたが、旧東京市以来の修史事業は、ここによりやく

従前の臨時的性格を脱して、その基礎を強固にした。さらに四十三年十月公文書館の設置に伴い、編纂事業もここに発展的に統合された。

出版再開を機に全く新たな構想の下に発足すべきであるとの意見もあったが、なお従前の体裁を踏襲することとし、未完結の數篇のうち、市街、産業の兩篇に編纂の主力を注いでいる。現在、市街篇は明治十八年、産業篇は明和年間と及んでいく。この兩篇のほかに、先に刊行の決定をみている市政、教育、交通、衛生等の諸篇に着手することは、現在ほもと

より将来とも容易になし得ないであろうとの考えから、これら諸篇に係る事象のうち主要なものは、市街、産業各篇の中へ組入れていく方針をとった。市街篇の内容が行政、社会、文化等の部門にもわたっているのは、こうした理由に因っている。

市街・産業篇とも年一卷刊行、各巻五〇〇部、予算不足からページ数は減少して八〇〇前後、図版、付図等も残念ながら省略する場合が多い。

集録範囲は、市街篇で約一か年間、産業篇では約四か年間である。

出版再開を機に、従前の方法を二、三改めたが、検索を容易にするため目次に年月日を付記することにした

点などその一である。

編纂上ではしばしば問題となる点は、市史稿が編年体であることからくる困難さである。すなわち、長期にわたる一つの事件、事象をいつの時点でとり上げるとかという問題である。大部の一件史料と関連史料を詳細に吟味のうえ決定しなければならぬが、常に十分の時間的余裕があるとは限らない。編纂職員は、現員わずかに六名(欠員一名、近く補充の予定)である。調査依頼や照会事項も多く、これに要する時間も少なくな

い。
なおほかに、刊行部数の増加など懸案も多い。困難はもとよりいとわれないが、十分にその使命を達成し得ているかをおそれるのみである。
付記

東京市史稿既刊一覧(51:3・31)
皇城篇五巻(完) 御墓地篇一巻(完)
港灣篇五巻(完) 遊園篇七巻(完)
変災篇五巻(完) 上水篇四巻(完)
宗教篇三巻(慶長七年まで)
橋梁篇二巻(安永三年まで)
救済篇四巻(慶応二年まで)
市街篇六七巻(明治十七年まで)
産業篇二七巻(宝暦十二年まで)

以上一〇篇一二三巻

別添附図四二点

農村文化と茶道

―「千秋家文書」の整理を終えて―

浅井潤子

西濃の中心地大垣市をあとにして近鉄養老線にゆられること約三十五分、西を眺めれば笹ヶ嶽・養老山の高峯を望み、東に目をうつせば雄大な掛斐川が静かに流れている所謂山と川にはさまれた平地、ここが「千秋家文書」のふるさと高田町なのである。すぐ近くには

わかえつゝ見るよしもがな

滝の水、老をやしなふ

名にもなかなれば

と一條兼良も詠じたことのある有名な養老の滝があり、一見風光明媚なゆたかな土地のように思われるが、一たび豪雨がくれば泥沼と化す所謂輪中地帯の中に位置する土地柄でもあった。

「養老」といえば、戦前の国史界の大御所黒板勝美先生が、お正月にはかならずここの千歳樓を訪れ、こよなく愛した土地であることは諸先生方に聞かされたものだが、「養老の滝」が観光地としてあまりにも有名すぎてか、岐阜を歩き廻っていた私

も、ついぞこの土地に足を踏み入れたことがなかった。数年前ある機会にやつとあこがれ(?)の地養老をたずね、あの雄壯な滝のしぶきにうたれつゝ、夏の涼をもとめて一時をすごした。

むすぶよりはや歯にひびく泉かなと有名な芭蕉翁の碑を眺めつゝ、ふとそのかたわらに立っている小さな妙見堂を参拝した。妙見堂は日蓮宗身延山の末寺で、松林に囲まれたそのたたずまいは、何んともいえない落着いた感じであった。この妙見堂は当館に所蔵されている千秋家文書の当主千秋庄六郎が中心となって建立した御堂であることをその時はじめて知ったのである。

それから数年、はからずもこの千秋家文書を私の手で整理することになったとき、あの妙見堂の清楚で静寂なたたずまいが、今更のように想い出された。

高田町に本據を構えて活躍した千秋家は「第二十五集千秋家文書目録」

の解題にも記したごとく、一八世紀末から十九世紀にかけて急速なテンポで土地集積をおこない、天明三年(一七八三)五月には、一度に七町五反壹畝貳拾壹歩の田畑を金八百五十両で買得しうる資力の蓄積がなされ、幕末期には土地保有面積が二百石以上もあつた典型的な地主であつた。幕末をのぞけば江戸時代を通じて村役人に就任した例はなく、千秋家がその財力を質店・油店・貸家など従来の家業に当てていたことは勿論であるが、他方文化方面への活動は特質すべきものがある。

さきの妙見堂の建立にさいしても莫大な資金をつぎこんだことによつて、現在の千秋家廃居の二因ともなつたことは、明治四十一年三月千秋棟重の記録中に父棟載大人ノ樋口信七・安田半兵衛ト共同ニテ江州田地ヲ購求シ、養老公園ニ妙見堂ヲ建立セシ為メニ大損害ヲ招キ云々と記している。

千秋家の文化活動は多方面にわたるが、なかでも千秋笹峰で代表される茶道は、高田町の農村文化に貢献した功績は大きいと思われる。

本稿ではこの茶人としての笹峰を中心としておこなわれた高田町の茶

道的一端を紹介し、如何に茶道が生活芸能の一つとして他の農村文化への影響力が強かつたかを考えてみたい。

幕末より大正期に至るまで在世した千秋(服部姓も併用)目録解題参照)笹峰は、墓地のある本立院(宝暦元年―一七五一―千秋庄六郎日秀創建)に建てられている碑にも

君多技能ニ読書一作レ詩、與ニ梁川星巖及村瀬藤城諸子一尤親善、因名ニ其社一曰ニ白鷗、一時喧傳、為至有下製ニ社識圖一者、上君又好ニ国学一慕ニ本居宣長、為人又妙心畫師ニ武登々庵、傍嗜ニ茶技一風流自喜、尤好ニ遠遊暇則千里裹糧云々

とあるように国学を学び、また絵画にも長じたが就中茶人として遊芸方面にも広く活躍した人である。

茶道は「嘉永二年己酉四月天目手順京師町田正波老ヨリウケ」と「天目手順覚」(史料番号一〇〇一番)の奥書に示しているが、京都の茶匠町田正波よりの直傳である。

笹峰の師である京都の茶人町田正波なる人物は、管見の限りでは、千家流の随流齊良休の高弟であつた覺々斎原叟の門人町田秋波の弟子(又は孫弟子カ)ではないかと思われる。

町田秋波は江州彦根の玉繩孫兵衛の弟で、家業を継がずに京に上り、表千家六代寛々斎原叟の門に入り茶人となった人で、この原叟の指示により町田秋波は尾州に派遣され、名古屋桜町筋の教授寺に止宿し、三々六か月にわたって熱心に名古屋町人を教授した一名町人茶道の師といわれた人である。秋波は享保八年（一七二三）に世を去っているので、おそらく笹峰の師である町田正波はこの秋波の流れを汲む表千家の流派の人かと想像されるが、正確な出自は詳らかでない。尾州においては宗匠町田秋波亡きあと、町田秋波に学んだ松尾宗二によって承け継がれ、のちに表千家寛々斎原叟より楽只斎の斎号を贈られ、名古屋松尾流が誕生したのである。（西山松之助氏「家元の研究」参照）

美濃地方はやはり尾州の茶道の影響はつよく、名古屋に最初に向向した宗匠町田秋波の門人の系統が農民茶道の普及につとめたと考えられる。一般にいわれている尾州の大名茶道から町人茶道へ、さらに美濃地方において農民茶道への浸透が見られるのである。

千秋笹峰と京都の宗匠町田正波との関係は、深い親交があったとみえ、

笹峰みずから遠く京都の宗匠の門をたたいて教を仰ぎ、また師匠の町田正波自身も美濃の高田の地を訪れては茶席を設けていたようであり、笹峰の催す茶席にも屢々顔を出していた。笹峰に宛てたつぎの書状にもその深厚の一端をうかがうことができる。（史料番号二八三七番）

拜呈春和相催候処、貴地御家内様愈御安寧珍重之御儀ニ奉存候、道中無事ニ帰京仕候、御安意ニ思召可被下候、先達岐阜地ニ御懇書添厚御礼申上候、御褒・婦久呂箱とも出来、此度さし上御落手可被下候、水涯さし上御所持ニも相成候得は忝仕合ニ存候、猶四月参上拜話ニ申上候、先用ひ可被下候、占銅御水涯持参可申候間左様ニ思召可被成候
御家室様へ宜敷傳達希上候、八郎兵衛様へも御同様ニ希上候、先御礼申上候、猶不遠参上拜話ニ万端申残候
頓首

三月六日 町田 正波
笹峰 様
玉床下

第二十五集目録の中にもみられる

ように、茶会は嘉永年代に非常に多く開催された（これは史料の残存性にもよるが）。笹峰が建立した茶室三十六峰庵でおこなわれた茶席の客人の多くは、当時この地方の地主、村役人層や文人・僧侶などの名が見えているし、笹峰も近隣の安田家、今尾の井上藤太夫家、親類の土屋篤四郎家などの茶席に招かれている。ちなみに嘉永二年己酉三月十六日夜三十六峰庵で京師町田正波氏を招いて催した茶席の次第書をみる。

客

京 町田 正波

京 若林庄左衛門

床 船橋 宗賢

釜 詩 短冊

炭斗 新具籠

香合 志野

方六 楽吉焼

後入 入

花入 青磁

花 武者りんどう

寒花 俗名丁子桜

水指 古銅耳付

茶入 古作黒蜜

袋 ドンス

町田正波書付

茶碗 静斎手造 銘洞

茶杓 比老斎作 白駒

蓋置 青竹

建水 朝鮮

茶 上林三入詰

菓子 祝の白

京亀屋製 小原木

会 席

古今利茶碗

若 鮎

向 山榊メ 汁 すまし

生 酢 浅草海苔

おこぜ

平 竹の子 但赤白半味噌

山のふき

松本菰皿ニ

焼物 味噌付鱈

茄子漬

吸物 養老松露

八寸 車海老ほぐし 柚びし

薄茶

茶入 唐物象牙

茶碗 萩

右之外道具前之通

惣菓子 墨形御所落馬

これらの茶会に共通してみられることは、使用される茶器をはじめ、床の書画その他諸道具に相当高価なものが多い。町田正波宗匠も前述の

書状にも筆峰に対して茶道のみならず、茶器に至るまでよく面倒をみている。茶道具の種類については筆峰だけでなく横曽根安田家で開かれた茶事目録にも

茶杓 細川三斎公作共筒

簀内竹翁書付箱蓋裏ニアリ

釜 浄元作 霰小丸釜

香合 織部

茶入 棟陰斎竹翁手造

茶杓 宗友作 銘節黒

箱小堀宗中書付

などが使用されており、また天保十亥十月六日正午利休居士式百五十年忌追善茶事につかわれたものの中には

茶杓

利休名物両口之杓
代々書付

覚々斎之節
鴻池へ拾六
貫目ニテウ
ル、今般同
人ヨリ進物

と記されている。これらの諸道具の中にはあるいは質物もあるかも知れない。ことに美術業者は農村の御大家は「鴨」であるときよく聞かされる。「かも」が最後まで「かも」ではないと思う。質物をつかまされては、段々と目が肥え、ついには立派な鑑定家にもなり得るのである。何事も一人前になるには月謝がいるといわれるがここに農村文化の向上があると考えられる。

丁度同時代（天保十年）の尾州において茶技流行につき、つぎのような狂詩がつくられている。（青窓紀聞）
流行無ニ貴賤一、国内一般茶・茶道、頻増備、風情各競奢、失時宗五跡、得勢裏千家、質物多奇妙、鑒訂勿ニ諷諒一

と。茶道によって茶道具類の研究となり強いては芸術への向上心も加わる。茶席において一緒に当然行われるのが香道であるが、千秋家自身も相当の香木を入手している事が「買物帳」にみられる。

もともと茶・香・花は一般には寄合芸能として同時に行われるものである。日常生活にもつとも密着した喫茶、その部屋で香を薫らせ、花をさして部屋を飾る。これは自分自身で出来る限りの範囲でもつとも優雅な生活をしようとする人間の本能ではなからうか。事実今日でもお正月は床の間に花を立て、茶を供え、香炉の香をたく風習は残っているところがある。

尾濃地方は古くから生活芸能の盛んなところであることは周知のことである。戦前は男女を問わず少くとも茶道・花道は修得する。私どもは尾張・美濃地区の史料調査（農村部を含めて）には茶道の心得がなくて

はできないとまで極言されている。

輪中地帯の宿命である洪水は、ひとたび豪雨に逢えば、低地は忽ちに泥水と化し、目にあまる惨状となる。それゆえに数村が共同して小堤を築き、輪中を組織しているが、その輪中も洪水になればその苦心の小堤も直ちに決潰して濁水渦をなして村内に入り、えいえいと耕した田畑も冠水し、家も流失してしまう。

こうして幾多の天災にもめげず、そこに一つの文化を通して生きがいを求める農民の豊さはどこにひそんでいるのか。ある人はいうかも知れない。それは石垣を高く築いてあまり被害をうけていない上層農民の遊芸ではないかと。しかし少くとも尾濃地方においてはその上層農民より次第に下層農民にまで、この茶道の浸透力は強いと考えられる。この地方では野良でまず一服という風景はよくみかけるのである。なお茶道といっても抹茶のみでなく煎茶についてもいえる。慶応三年秋に千秋家が京都馬場町美濃部忠兵衛御用御茶所より購入している「御茶之通」でその銘柄をみると相当高級な煎茶をのんでいることがわかる。

この銘柄の中には、幕末の黒船渡来で一世を風靡した狂歌「生喜撰（蒸

氣船」の名も出ている。



高田町における茶道は煎茶を含めて生活芸能の基盤としての役目を果たし、香・花・俳諧へと、さらに民俗芸能といわれる村の祭りへと、その輪は次第に農村文化を育てる大きな原動力となった。

受贈図書

昭和五十年(二)

城下町鳥取誕生四百年(鳥取市教育委員)

会)

(鳥取県) 溝口町誌

(島根県) 海士町史

(愛媛県) 中島町誌史料集

(福岡県) 朝倉町史資料 第一、四集

港区歳時記 一 [港区立三田図書館]

墨田誌考 上 [墨田区広報課]

港北ニュータウン地域内文化財調査報告

金石文 [横浜市文化財調査会]

横浜史料 1 皇国地誌 [同右]

横浜市文化財地図 [同右]

図書寮叢刊 詞林金玉集 下巻・九条家

文書 五 [宮内庁書陵部]

明治天皇記 第十一 [同右]

(宮城県) 小野田町史

憲政資料目録 第十、井上馨関係文書

[国立国会図書館]

群馬県文化財目録

群馬県遺跡地図

本庄市史料 第九巻 (中)

武蔵野文庫解説目録 [武蔵野市]

武蔵国多摩郡羽村指田家文書目録 [新宿

区立中央図書館郷土資料室]

横浜市立大学目録叢刊 第6集 三枝博

音文庫目録 [横浜市立大学図書館]

和歌山県文化財目録 昭和49年3月

海野文庫目録 [島根大学付属図書館]

蔵書目録 第七輯 [愛知県立大学附属図

書館]

日本の歴史 21 町人 [小学館]

内閣文庫収書目録 第37号

横浜文書目録 (一) 長光寺文書 [横浜市

文化財研究調査会]

神奈川県明治初期行政目録 太政類典之

部 (一) [神奈川県立文化資料館]

明治大学刑事事博物館目録 第31集

学術文献収報 第165、170号 [北海道教育

大学附属図書館]

北海道刊行政資料目録 9

くらしのなかに図書館を [相模原市立図

書館]

譜牒餘録 下 [内閣文庫]

小樽市史 第6巻

岩見沢市史 資料 第二、四集

樺太終戦史年表 [北海道総務部]

樺太千島関係外国主要文献の解説 (ソ連

邦の部) [同右]

露文「千島概史」[同右]

青森県立図書館郷土双書 第6・7集

[青森県立図書館]

郷土史叢 第一集 [盛岡市郷土史叢刊行

会]

多賀城と古代日本―埋もれた史跡をたず

ねて― [東北歴史資料館]

鶴岡市史 下巻

(山形県) 朝日町史編集資料 第4・5号

山形市史資料 第40、43号

上山市史 別巻下 民俗資料編

(山形県) 櫛引町史

いわき市史 第二巻 近世

福島県教育史編さん資料 第7・8集

近世村落解体期の経済構造 [立正大学古

文書研究会]

武州岩槻藩大岡家史料 [岩槻市教育委員

会]

埼玉生活文化史シリーズ I [埼玉県立

文化会館]

埼玉県議会史 第6巻

浦和市文化財調査報告書 第13・19集

文化財の調査第3・4・10・11集 [浦和

市教育委員会]

戸田市文化財調査報告 I、IV、VII、XI

戸田市の文化財

船橋市史 現代篇 上

流山市史料集 第5集

流山市金石文記録集 下巻

東京都文化財調査報告書 18・22、25

江戸川区郷土資料集 第3・8集 [江戸

川区郷土資料室]

府中市自然調査報告―第4次調査― [府

中市立郷土館]

港区の文化財 第6・9・10集

青梅市史料集 第20号

青梅市の民俗 第一、二分冊

徳山市立図書館双書 第廿一集

青森県民俗資料図録 第1集 [青森県立

郷土館]

ペルー・チョソン親善文化協会書記長の

質問にたいする回答 [外国文出版社]

Korean Culture Series 3・4 [国

際文化財団]

BEITRÄGE ZUR JAPANOLOGIE 12

[ウィーン大学日本文化研究所]

高石市郷土史研究紀要 第四、六号 [高

石市教育委員会]

日本外交文書 第三十一冊之二 第三十

二冊 第三十三冊 [外務省]

第14回特別展 昭和20年 [北海道開拓記

念館]

第7回特別展 頼山陽と伊丹 [伊丹市立

博物館]

秋季特別展図録 海と生活―輪島―

[石川県立郷土資料館]

浅野家寄託史料展 浅野家寄託史料目録

[広島市立中央図書館]

宇部古代文化展 [宇部市立図書館]

学芸百科事典 18 [旺文社]

図説 日本の歴史 Ⅱ〔集英社〕

日本史論集〔大阪大学〕

文化財調査報告 第13・14集〔北上市教
育委員会〕

昭和44・45年度 神奈川県古民家調査報
告書 神奈川県の民家―足柄地方

神奈川県労働運動史 第二―四巻・戦前
編〔神奈川県〕

小田原市立図書館郷土資料集成 1
平塚市文化財調査報告書 第6・8・10・
11集

〔新潟県〕与板町史

豊栄年表資料 第四集〔豊栄市博物館〕

富山県教育史 下巻

富山県郷土史会叢書 第三・六

〔富山県〕八尾町史

魚津市史 下巻 現代のあゆみ・近代の
ひかり

高岡市史 下巻

長野県史 近世史料編 第八巻〔北信
地方

〔長野県〕下諏訪町誌 下巻

長野県教育史 第10巻 史料編4

御殿場市史 第二巻 近世史料編

博物館資料集 1・2〔久能山東照宮博
物館〕

別府市誌

昭和49年度ふるさと年中行事調査報告書

〔愛媛県教育委員会〕

昭和46・47年度民俗資料調査報告書〔同

右

松山市文化財調査報告書 Ⅶ

因島市史料 第5・8・9集

〔岡山県〕富村郷土史

平城宮発掘調査出土木簡概報 〔一〕・〔二〕
〔九〕〔奈良国立文化財研究所〕

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報 〔一〕
〔同右〕

芦屋市文化財調査報告 第8集

和泉市史 第1巻

富田林市史研究紀要 第三号

中島家近世古文書史料集 第二集〔中島
三佳〕

井手町史シリーズ 第二集

新城市誌資料 Ⅶ・Ⅷ

矢作川流域の文化〔名古屋女子大学〕

糟谷縫右衛門家文書御巡見様覽書〔愛知
県吉良町教育委員会〕

浜松市立郷土博物館叢書 第1輯・第2・
3・6集

新著資料 第65・66号〔北海学園大学図
書館〕

蔵書目録 第2・7分冊〔北海道立図書
館〕

紀州経済史研究叢書 第一―一四・一六
―二三〔和歌山大学紀州経済史文化史
研究所〕

紀州史研究叢書 第1―19号〔同右〕

樺太関係資料総括目録〔未定稿〕〔北海道
総務部〕

本田新・資料目録〔室蘭市立図書館〕

岩手郷土史 3〔岩手郷土史刊行会〕

樺太千島関係外国主要文献所在目録〔北
海道総務部〕

世界経済問題研究叢書 第5―12輯〔近
畿大学世界経済研究所〕

田子倉皆川家文書目録〔渡部政吉〕

青森県内出版物惣目録〔青森県立図書館〕

昭和45・49年版

行政資料目録 追録第3・5・6号〔青
森県行政資料室〕

蔵書目録 2・6・8・10〔宮城県立図
書館〕

近世在町の研究 近世における村の諸問
題〔秋田近世史研究会〕

秋田県立図書館報「ともしび」別輯
第四―六号〔秋田県立秋田図書館〕

郷土文献目録 2・3〔同右〕

菊地文庫・秋林文庫・田口文庫 目録
〔同右〕

時雨庵文庫目録〔同右〕

住友春翠 再版〔芳泉会〕

岩手の獅子頭〔権現さま〕〔北上史談会〕

天童市史編集資料 第1―3号

滝谷城 新潟県刈羽郡刈羽村滝谷〔柿崎
高校〕

石川県教育史 第一巻

高棚町は場整備のあゆみ 黒嶽今昔

宮崎県史料 第一巻〔宮崎県立図書館〕

所蔵資料目録 第二集〔古河市教育委員
会〕

会

行政資料目録 第8号〔茨城県行政資料
室〕

桐生市村岡家・吉田家外諸家文書目録
〔桐生市立図書館〕

郷土資料分類目録 第9分冊〔市立函館
図書館〕

別冊太陽 平家物語絵巻 料理〔平凡社〕

人物探訪日本の歴史 18〔晩教育図書〕

図説 日本の歴史 12・13〔集英社〕

江戸時代図誌 4・14・21〔筑摩書房〕

図詳ガッケンエリア教科事典 1 日本
歴史〔学研〕

大磯町生沢地区 民俗資料調査報告書
〔神奈川県大磯町教育委員会〕

郷土のあゆみと文化財 第一・二集〔茨
城県藤代町教育委員会〕

豊橋市史 第二巻

豊栄年表資料 第一―三集〔豊栄市博物
館〕

豊島区史 資料編 一、地図編下

家譜略 全 古家撰伝集覽書〔同志社大
学人文科学研究所〕

祇園会山鉾「鷹山」関係資料〔上〕・〔下〕
〔同右〕

西陣機業の研究〔同右〕

横浜の空襲と戦災 第二巻〔横浜市〕

島田市立図書館叢書 第五・六集

兵庫県史 第二巻

川崎市文化財調査集録 10

沼津資料集成 Ⅲ〔沼津市立駿河図書館〕

沼津市史料集 第四・五

甲州文庫史料 第四卷〔山梨県立図書館〕

鎌倉国宝館論集 第十八

石川県教育史 第二卷

上山市史編集資料 第13・15集

奥田家文書 第十二・十三卷〔大阪府立

図書館〕

吹田市史 第二卷

図録 日本の貨幣 9・11〔日本銀行調

査局〕

埼玉資料年報 昭和41・44・46年度〔埼

玉県立図書館〕

上尾市史資料 第3・4集〔上尾市図書

館〕

室蘭港湾資料 第四集〔市立室蘭図書館〕

郷土資料写真集 第15集〔盛岡市公民館〕

昭和五十一年度 (一)

鹿児島県史料 旧記雑録 追録六 忠義

公史料 第三卷

愛媛県編年史 第一〇卷

藤沢市史 第三卷

文化財シリーズ 14〔杉並区教育委員会〕

水戸市史 中巻(二)

(岐阜県) 具正町史 通史編

長野県史 近世史料編 第八卷(二) 北信

地方

大分県文化財調査報告 第二七・二八・

三一・三三輯

北九州市文化財調査報告書 第1・6・

10・11・16・20集

図解 6年の社会〔学習研究社〕

標準 学習カラー百科 12〔同右〕

北海学園大学増加図書目録 第11号

北上市内町野庄治工門家記録目録

(北上市史編さん室)

北上市飯豊町成田小原毅雄氏所蔵文書目

録〔同右〕

飯豊町藤沢八重樫半助氏所蔵文書目録

(同右)

和賀郡江釣子村後藤長男家文書目録〔同

右〕

鶴岡百年のあゆみ〔鶴岡郷土史同好会〕

旭市史 第三卷

青森県無形文化財調査報告書 第一集

山口県史料 近世編 法制上〔山口県文

書館〕

富山県史 史料編Ⅱ 中世

尼崎市史 第七巻

古原市史 上巻

福島市史資料叢書 第29輯

知恩院史料集 日鑑書翰編 二〔総本山知

知恩院史料編纂所〕

品川区史 続資料編(一)(二)

(福井県) 三国町史料 海運記録

(静岡県) 土肥町郷土誌叢書 第一輯

大塚製靴百年史

成田山教化読本〔新勝寺〕

近世の学芸―史伝と考證―〔三古会〕

日本の文様 22〔光琳社〕

書の日本史 第九巻〔平凡社〕

(日本の道具〔続売新聞社〕

巽齋集〔朴致和〕

越後中世人物史 ①〔花ヶ前盛明〕

青梅市の民家〔青梅市教育委員会〕

中野の文化財 No.1〔中野区教育委員会〕

明治以降愛知県史略年表〔愛知県文化会

館〕

大阪府市町村沿革図表〔大阪府府史編集

室〕

大阪三郷古町名便覧〔同右〕

史料叢書 清末藩旧記 第一―三冊〔下

関文書館〕

愛媛部落史料―近世―明治初年―〔近

代史文庫大阪部会〕

大隅半島北部有形民俗資料調査報告書

(鹿児島県明治百年記念館建設調査室)

浦和の検地帳〔浦和市立郷土博物館〕

日光叢書 社家御番所日記 十六〔東照

宮社務所〕

下北半島のニホンザルおよびその生息北

限地緊急調査報告書〔青森県教育委員

会〕

北海道開拓記念館報告 第10・11号

大館市編さん調査資料 第十六集

(岐阜県) 金山町史 下巻

土浦市史

茨城県史料 近世社会経済編 Ⅱ

川越市史 史料編 中世 I・II

群馬県史料集成 2〔群馬大学〕

(埼玉県) 大滝村誌 資料編四

世田谷区史料 第八集

町田市史 下巻

神奈川県民俗調査報告 8〔神奈川県立

博物館〕

明治小田原町誌 中〔小田原市立図書館〕

岐阜大学教育学部郷土資料 (7)

真宮遺跡調査概報 2〔岡崎市真宮遺跡

調査会〕

堺市史 続編 第六巻

部落解放と人権〔関西大学部落問題委員

会〕

岩手大学附属図書館概要

雅楽資料展 出陳目録〔上野学園日本音

楽資料室〕

埼玉の伝統産業文書展〔埼玉県立文書館〕

斎藤与理〔埼玉県立博物館〕

北相馬の殿さま小文間村〔取手〕の文書

(取手一高郷土史クラブ)

近代沿革図集 新橋・芝公園・芝大門・

浜松町・海岸〔港区立三田図書館〕

河内長野市史 第五巻 史料編二

かわにし 川西市史 第二巻

朝日新聞記事集成 第三卷 (枚方市史編纂委員会)

和歌山県議会史 第四卷
千葉縣史料 近代篇 明治初期六

青森県埋蔵文化財調査報告書 第26・29・31集

愛知県立大学創立十周年記念論集
太政類典目録 中 (国立公文書館)

福島市史 第13卷 索引・年表

青森県民俗資料図録 第3集 (青森県立郷土館)

大田区史 (資料編) 平川家文書 2

山形県史 資料篇16 近世資料1

港区歳時記 二 (港区立三田図書館)
文化財シリーズ 第22集 武蔵国豊島郡

栃木県史 史料編 近世二・近現代一

四ツ葉村文書目録 (板橋区教育委員会)

群馬県教育史 第四卷 昭和編

伊場遺跡発掘調査報告書 第一冊 (浜松市郷土博物館)

田島家文書 第四・五卷 (東京都教育委員会)

徳島県部落史関係史料集 第一集 (徳島県教育委員会)

文化財の保護 第八号 (同右)

高岡郡日高村資料調査報告書 (高知県立郷土文化会館)

横浜市文化財調査報告書 八巻の六

品川海徳寺史

長野県教育史 第六卷 教育課程編三

青森県天然記念物調査報告書 第6集

豊橋市史 第六卷

藤沢市史料集 二 (藤沢市文書館)

埋蔵文化財発掘調査概報 一九七六

岐阜市史 史料編 古代・中世・近世一

鳥取県史 第七卷 近世資料

高木家文書調査報告 V (名古屋大学高木家文書調査室)

新修尾道市史

江戸時代の科学技術書展示目録 (国立公文書館)

世界経済問題研究叢書 第13輯 (近畿大学世界経済研究所)

大阪府会史 第三編 上・下巻

学世界経済研究

(石川県) 志賀町史 資料編 第二巻

大岡越前守忠相日記 下 (大岡家文書刊行会)

「丹後の花踊」調査報告書 (京都府教育委員会)

八戸市史 通史編

北海道開拓記念館研究報告 第3号

白石市史 別巻 考古資料篇

成田市史 近世編史料集 五上

新庄市萩野広野家文書 第二集 (新庄市教育委員会)

墨田誌考 下 (墨田区)

新庄市萩野広野家文書 第二集 (新庄市教育委員会)

東京市史稿 産業篇第二十・市街篇 第六十七

神奈川県史 資料篇 8・14・17

静岡市史 近世史料三

(石川県) 富来町史 続資料編

横浜の空襲と戦災 1 (横浜市)

枚方市史 第十巻 史料V

和歌山市史 第六巻 近世史料II

泉屋叢考 第拾六輯 (住友修史室)

弘前図書館関係略譜

九州歴史資料館および太宰府周辺の御案内

埼玉県立歴史資料館

博物館利用の手引 (秋田県立博物館)

秋田のおいたち (同右)

勝平得之創作版画図録 (同右)

民俗展シリーズ 3・4・5 (青梅市郷土博物館)

永田二郎展 (埼玉県立博物館)

展示品図録 (青森県立郷土館)

両門地方の禁制 (京都府立丹後郷土資料館)

資料解説シリーズ No. 3・4 (北海道開拓記念館)

常設展示解説書 4 (同右)

青森県民俗分布図 (青森県教育委員会)

ねぶたの歴史 (弘前図書館後援会)

青森県立郷土館調査報告

本間家土地文書 第一巻 (農業総合研究所)

栃木県史 資料編・考古一 史料編・中世五

蔵市立図書館郷土資料集 第十四集

埼玉古墳群とその周辺 (埼玉県立さいたま資料館)

門田遺跡群 (八王子門田遺跡調査会)

渋谷区の文化財

明治23年東京市区改正全図 (東京都)

羽島市制二十年史

岡崎市のトンボ (岡崎市教育委員会)

岸和田市史 第六巻

同和教育史兵庫県関係史料 第一巻 (兵庫県教育研修所)

加古川市 文化財めぐり

和歌山県史 近現代史料一・近世史料四

紀州史研究叢書 第二十号 (和歌山大学紀州経済史文化史研究所)

松山市文化財調査報告書 8・11

朝倉橋廣庭宮跡伝承地第3次発掘調査報告 (九州歴史資料館)

大宰府史跡 (同右)

大宰府史跡出土木簡概報 (二) (同右)

経済と思想 (日本経済史研究所)

札幌市資料館

安藤昌益 (平凡社)

唐津・萩 (同右)

大塚製靴百年史 資料

報

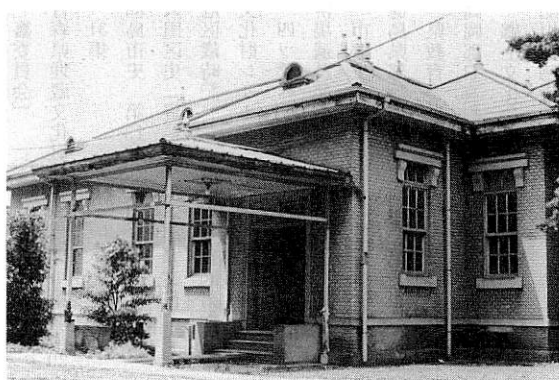
昭和五一年度事業（その一）

一、史料の収集予定

昨年度に継続して京都柏原文書のマイクロフィルムによる収集を行なうほか、河内国若江郡下小坂村山沢家文書のマイクロフィルムによる収集を予定している。

二、史料の所在調査

本年度の第一次所在調査は山形県北村山郡大石田町高桑家文書（最上川舟宿）・尾花沢市五十沢石塚家文書（地主）を対



旧館正面玄関

象として、山形県史編纂室梅津保一氏のご協力を得て、八月二七―二九日、当館からも榎本宗次が参加して調査を実施した。なお調査の概要は次号掲載予定である。第二次は千葉県富山町荒川高科家文書の調査を実施する予定である。

三、第二回近世史料取扱講習会

本年度の講習会は次の通り開催される。

第一会場 岡山県総合文化センター（岡山市） 九月二七日―一〇月一日

第二会場 国立教育会館（東京都） 一〇月二五日―二九日

四、定期刊行物の発行予定

1 『史料館所蔵史料目録』第二十七集に「下総国相馬郡藤代村飯田家文書」（その二）を収録。

2 『史料館研究紀要』第九号

3 『史料館報』本号および第二十六号（五二年三月）を刊行。

五、研究会

第一回（五1・5・27）

会の運営打合せ

第二回（五1・6・24）

史料の翻刻について 浅井潤子

第三回（五1・7・15）

同右続き

第四回（五1・8・31）

村方文書の基本類型と授受の体系

大野瑞男

○評議員会

七月一六日、如水会館で評議員会総会が開催された。なお評議員の改選があり史料部会関係は次の各氏である。（敬称略・五十音順。任期Ⅱ昭和五一・七・一―五三・六・三〇）

石井良助（専修大学教授）、白田甚五郎（国学院大学教授）、大久保利謙、兒玉幸多（学習院大学長）、小葉田淳（京都大学名誉教授）、小林清治（福島大学教授）、鈴木忠直（日本近代文学館専務理事）、豊田武（法政大学教授）、中村幸彦（関西大学教授）、秀村選三（九州大学教授）、古島敏雄（専修大学教授）、寶月圭吾（東洋大学教授）

○文部省科学研究費交付

◇一般研究（B）四四〇万円

近世史料の体系化に関する基礎的研究 代表者 鈴木寿（分担者八名）

○計報

当館教授鎌田永吉氏は今年五月三〇日から慈恵医大付属病院に入院中のところ白血病のため、六月三〇日午前六時五〇分永眠された。享年四四才。氏は秋田大学卒、東北大学大学院を経て、昭和三七年四月から文部省史料館に勤務。主として大名・旗本文書の調査研究を担当。史料館改組後の四九年から第一史料室長。積極的な企画性・行動力を以って館業務の推進力となるかたわら、暮末・維新期の

近代自由民権運動などを研究テーマとし、農村史料調査などを通じて後進の指導につとめられ、また秋田県史・会津若松史・水戸市史等、地方史誌の編纂に参加執筆するなど、その活躍は多方面に亘った。その業半ばにして急逝されたことは誠に痛恨極まりない。心から哀惜の意を表してやまない。

○編集後記

今回は明治以来の伝統をもつ東京都公文書館の『東京市史稿』の編纂の在り方について菊池昭氏のご報告を得ました。公務が多忙のところを厚礼申し上げます。明治から昭和初期にかけての「洋式建築」の保存運動が漸く昂ってきた昨今、大正中期の鉄筋書庫として貴重な旧三井文庫屋棟の一部を残して取壊すことは諸般の事情によるとはいえ、史料保存機関当事者として恠怩たるものがあり、複雑な心境である。閲覧利用の各位への迷惑をお詫びいたします。

史料館報

第二五号

昭和五一年一〇月二〇日 発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ六ノ二
国文学研究資料館内

国立史料館
電話（七八三）九一〇六（代）

印刷所 勝美印刷株式会社
東京都文京区小石川三ノ一四

電話（八一三）五二〇一（代）